

# 阮籍詠懷詩試論

——表現構造にみる詩人の敗北性について——

大 上 正 美

## はじめに

魏の阮籍(二一〇～二六三)の「詠懷詩」五言八十二首の連作(他に四言詩三首)は、劉宋の顔延之の頃から既に指摘されてきたように、時代の苛酷さを背後に抱えこんでいるが故にまことに複雑である。しかも阮籍の生きた個々の現實をそっくりそのまま詩の索引とすることにも大きな落とし穴が待ちうけている。何故ならば「詠懷詩」は、歌われた場や時を全く喪失している自己表出のみで成立しているからである。かといつて、「詠懷詩」が現實との關係を構造として持たぬ、というのではない。場と時を喪失してしまつてゐるがために、むしろ逆に現實との關係に於いてより一層本質的なものが要請されるのである。

本稿では、「詠懷詩」の表現構造自體が、本質的に構造的に現實と入詩との關係を抱えこんでゐる、という觀點から論ずるのを目的とする。つまり、現實的意識から想像的意識への架橋がどのようなになされ、どのような特性を有

するかについて、基本的な表現構造を通して考察を加えんとするものである。

## 一 其一にみる基本構造

十七首を選録した『文選』卷二十三にも、八十二首を初めて収録した『古詩紀』魏第九にも冒頭におく詩について、先ずその基本構造を明らかにしておく。

### 其一

夜中不能寐 夜中なるに寐ぬる能はず

起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を彈ず

薄帷鑒明月 薄帷に明月鑒り

清風吹我襟 清風 我が襟を吹く

孤鴻號外野 孤鴻 外野に號び

翔鳥鳴北林 翔鳥 北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何をか見る

憂思獨傷心 憂思 獨り心を傷ましむ

右の詩の表現構造の上で、次の三點が著しい特徴と考えられる。

第一は、現實の總體を背後に丸ごと抱えこんで△詩▽がはじまる、という點である。起句の「夜中不能寐」というのは、憂思を抱いて生きることを強いられる現實の總體を背後に持つているが故になのである。まさにそこから△詩▽の世界ははじまる。この場合の背後の現實なるものを具體的な生活過程として把握する試みは、阮籍の現實の生の側からの追究にまかさねばならない。その試みは今後の課題として、ここでは具體的なあれこれでなく、政治権力や生活情況、と同時に家系と資質の問題、さらには人間存在としての有限性の問題、などを含めた全體性の缺如として把握し、それを前提として考えてゆくことにする。すなわち、阮籍は現實の前で負でしかない存在として孤立して、△詩▽はまさにそこからはじまる、ととることができるのである。(第一點については二で展開する。)

第二は、「起坐」していつしか「徘徊」している時間と空間、つまりは現實を逸脱する時間と空間の問題である。「彈鳴琴」「薄帷鑿明月」「清風吹我襟」などと對象そのものへの深い同化の意志を示す。しかしそこに於いて阮籍が見たり聞いたりしなければならぬのは、またしても現實の

かげでしかない。現實の情況のざわめきの予感と恐怖であら、内に殺した悲痛な歎きと憤りである。「孤鴻號外野、翔鳥鳴北林」には、逸脱の時間と空間に於いてすら現實のかげに強いられた阮籍の感受性が、敗北的に語られている。(第二點については三で展開する。)

第三は、虚しさだけを抱えて徘徊している自分から、はつと現實の我にかえされ、より一層の「憂思」を深めながら再び現實に歸つてゆく點である。つまり、逸脱から現實への回歸である。しかもその回歸は、二重の敗北性を背負つての、さらに憂思を深めるかたちでしかない、苦い回歸なのである。(第三點については四で検討する。)

其一の詩にみられるこの基本構造は、よく知られた次の挿話とそっくりそのまま對應している。

時率意獨駕、不由徑路、車跡所窮、輒慟哭而反。(魏氏春秋・三國志王粲附傳注引)

第一は、抑壓を強いる現實が背後に頑としてあり、それが阮籍をして急ぎ立てる。そのために「時として意に率つて」現實を激しく逸脱してしまう。第二は、しかしその逸脱も意のみが先走り「徑路に由ら」ないために、「車跡の窮まる所、輒ち慟哭」せざるを得ない。言つてみれば、逸脱の先きに何もなく、かえつて逸脱の激しさだけが突出し

宙吊りになるといふ、二重の敗北性を抱えこむ。逸脱は慟哭に慟哭を相乗するしかなかつたのである。第三は、その慟哭を引き摺つたまま、現實の生活へ「反」つてゆく。このようにこの窮途の慟哭の挿話は、「詠懷詩」の表現構造を考へる上で大いに示唆に富む話だと言へるだろう。以下にこの基本構造について展開させながら、さらなる検討と吟味を加えてみることにする。

## 二 現実からの逸脱・〈詩〉のはじまり

「詠懷詩」五言八十二首には「徘徊」が四例、「彷徨」が一例ある。また詩句の中に直接的には表わされなくとも、詩の内部世界では明らかに「徘徊」が内在している詩は多い。それらは必ずしも夜とは限らないが、其一の「徘徊」が夜をモチーフにしていたので、次に夜から翌朝にかけての詩をみる。

### 其十四

開秋兆涼氣 開秋 涼氣を兆し

蟋蟀鳴床帷 蟋蟀 床帷に鳴く

感物懷殷憂 物に感じて殷憂を懷き

悄悄令心悲 悄悄として心をして悲しましむ

多言焉所告 多言 焉にか告ぐる所ぞ

繁辭將訴誰 繁辭 將た誰にか訴へん

微風吹羅袂 微風 羅袂を吹き

明月耀清暉 明月 清暉を耀かす

晨鷄鳴高樹 晨鷄 高樹に鳴けば

命駕起旋歸 駕を命じて起ちて旋歸せん

晨鷄が高樹に鳴いて、はつと現實にかえされるまでの時間、それこそは詩に内在する「徘徊」の時間である。いつしか徘徊せざるを得ないのは、秋の訪れのためばかりではない。「多言」とか「繁辭」とかの物言いからもわかるように、沈黙を強いられる現實の總體を前に生きることの辛酸を嘗めつくしているが故に、その感じやすい心はしのびよる秋の訪れにも敏感なのである。

これら「徘徊」の時間は、とぐる巻く想念の時間、泳えきれずに突き上げてくる熱い情動の時間と言へるのである。

「徘徊」が想念もしくは情動の逸脱だとするなら、一方では行爲として激しく突出してしまう場合がある。「登高」(四例)、「出門」(三例)、「出上東門」(二例)、「驅車」(二例)、「驅馬」(三例)などである。

先ず、いきなり冒頭から行爲として突出してしまう例をみる。

其十三

登高臨四野 高きに登りて四野に臨み  
北望青山阿 北のかた青山の阿を望む

松柏鬢岡岑 松柏 岡岑を鬢ひ

飛鳥鳴相過 飛鳥 鳴きて相過ぐ

感慨懷辛酸 感慨して辛酸を懷き

怨毒常苦多 怨毒 常に多きに苦しむ

……(略)……

登高のはての感慨はまことに辛い現實認識を深めるものでしかなかるうとも、詩人をして登高へ驅り立てたのは、苛酷な現實の總體の前での全體性の缺如への焦燥に違いない。次の詩は特にそのことを示している。

其三十

驅車出門去 車を驅りて門を出でて去け

意欲遠征行 意は遠く征行せんと欲す

征行安所如 征行して安くにか如く所ぞ

背棄夸與名 夸と名とを背棄せよ

夸名不在己 夸と名とは己に在らず

但願適中情 但だ中情に適はんことを願ふのみ

……(略)……

動詞の極度の多用、「征行」「夸名」の重用、自問と自己

背棄のことは、これらを軸に自己を一つ一つ納得させながら、納得させることによつてより激しく逸脱という行爲に自らを驅り立ててゆく焦燥感が、よく表現されている。△詩▽の空間を「徑路に由らず」突走つてゆくところが魅力となつているのである。

△詩▽は冒頭から逸脱の意志を示す以外に、詩の中途から突如として噴出する場合もある。

其三

嘉樹下成蹊 嘉樹 下に蹊を成す

東園桃與李 東園に桃と李とあり

秋風吹飛藿 秋風 飛藿を吹けば

零落從此始 零落 此より始まる

繁華有憔悴 繁華にも憔悴有り

堂上生荆杞 堂上にも荆杞を生ず

驅馬舍之去 馬を驅りて之を捨てて去け

去上西山趾 去きて西山の趾に上れ

一身不自保 一身すら自ら保たざるに

何況戀妻子 何ぞ況んや妻子を戀ひん

凝霜被野草 凝霜 野草を被ふ

歲暮亦云已 歲暮れて亦た云に已みぬ

△詩▽は突如七句から噴出する。自己への命令形で示さ

れる逸脱の噴出である。自己を驅り立てる激しさが、詩の途中で突如として堰をきつて噴出するのである。しかもこの逸脱の激しさこそは、實は、一句から六句までの辛い思いと、九・十句の嚴しい現實認識によつて支えられているのである。

ところで、前に見た「徘徊」の世界が概ね夜の想念の世界だとすると、ここで見る行爲として突出する逸脱の噴出は晝の世界と言える。次の詩には夕暮れへ向けての時間が内在する。

### 其十七

獨坐空堂上 獨り空堂の上に坐す

誰可與親者 誰か與に親しむ可き者ぞ

出門臨永路 門を出でて永路に臨むに

不見行車馬 行く車馬を見ず

登高望九州 高きに登りて九州を望めば

悠悠分曠野 悠悠として曠野分る

孤鳥西北飛 孤鳥 西北に飛び

離獸東南下 離獸 東南に下る

日暮思親友 日暮れて親友を思ふ

晤言用自寫 晤言して用て自ら寫のぞかんに

友人のいない孤絶感に追ひ立てられるかのように登高

し、全體的視野を獲得せんとして夕暮れになるまで佇み耐えている姿がここにある。つまり夕暮れまでの時間が内在しているのであり、それは深夜から明け方までの徘徊の時間と對置できる。

さらにこの詩は、二重の突出の詩とも讀める。眞晝間から獨りで人氣のない室に坐つているのは、現實の辛苦に耐えているのである。そうであるからこそせめてのことに歡びを分ち合える友を求めて、急ぎ立てられるように「出門」する。ところが路に友の姿はあろうはずはない。激しく焦燥感に驅り立てられた詩人はさらに突出し、「登高」するのである。

また一方、この詩は逸脱の意志の激しきで成立するので、激しさだけが宙ぶらりんになるとも言える。「出門」しても友はいない、「登高」しても見るのは孤鳥や離獸でしかない。意志だけが激しく宙吊りになつて吊されているのである。このことを先に引いた窮途の慟哭の挿話で言えれば、「徑路に由らず」車を走らせる、そこには意ばかりが先走る焦燥感があり、現實逸脱の激しさだけが突出している、従つて「車跡の窮まる所」では、車を走らせる意志だけが宙吊りになつて慟哭せざるを得ない、ということになる。

以上のことをまとめると、どうにもならぬ現實の總體を丸ごと抱えこんで、深夜とぐるを巻く熱い想念と、白晝いきなり噴出する激しい逸脱の意志とが、「詠懷詩」の大きな魅力となつてゐる、と言へる。

さらに今弓と矢の比喩で言うなら、詩は確かに矢を放たれた瞬間はじまるには違ひない。だがより正確には、矢を放たんとする時弓が大きくしなる瞬間——現實的意識（現實空間）から想像的意識（表現空間）への架橋（入口）に於いて「詠懷詩」の「詩」ははじまる、と言うべきなのである。しかも、と同時に弓の引きの強さ、そこにこそ「詠懷詩」の特性がある。現實の引きの強さとは、阮籍の抱えこんだ苛酷な現實と、それへの冷徹な凝視の眼を指す。其三では、「一身不自保、何況戀妻子」という嚴しい現實凝視の眼があればこそ、△詩は中途から突如「馬を驅け！之を捨てて去け！去け！西山の趾に上れ！」と噴出する。あるいは其十七でみた二重の突出。それらが弓の引きの強さとして作用する。このように、現實という弓の引きが強ければ強いだけ、逸脱の矢は激しいのである。

## 二の補

現實からの逸脱が「詠懷詩」に於ける「詩」のはじまりと考へてきたのであるが、それを今ごく簡単に別の角度

——現實の生の側の挿話に對置させて考へてみるなら、「現實からの逸脱」を、視られる存在から視る存在への轉位、というふうに捉へることも可能かと思はれる。

阮籍は最も輕蔑する權力追従者たちへしばしば呪咀に滿ちたことばを叩きつけるが、その一つに「世有此龔黷、芒芒將焉如」（其五十七）と呼ぶ言い方がある。しかしながらその實、現實の生に於いて「龔黷」たる存在を強いられていたのは、他ならぬ阮籍自身なのである。今を時めく權力者司馬昭から「天下之至愼者、其唯阮嗣宗乎」と評された話も、阮籍の内面の呻吟抜きには語れない。權力者は常に視る側の人間として、すべてを風景として視る。阮籍なる男は「未嘗評論時事、臧否人物」であるからこそ、司馬昭も度量大きく評價しておれる。反對に、一箇の風景としてではなく一人の視る存在へと轉位しようとする者がいれば、當然權力者は容赦しない。その關係を冷徹に見抜いた阮籍は、徹頭徹尾視られる一風景たる存在を強いられ、權力者に害なき存在として「至愼」という名譽を受け、しかもそういう自分をも甘んじて耐え續けてゆくのである。

視られる側の人間、例えば友人の嵇康の側から考へてみても、嵇康は常に視られる存在として沈黙を守る阮籍を高く評價していた。「阮嗣宗口不論人過、吾每師之而未能及。」

これは司馬昭の上から下した評價と同じ物言いでありながら、しかしその位相は對極をなす。やはりことは、王戎から「與嵇康居二十年、未嘗見其喜慍之色」<sup>法</sup>と評された嵇康その人にして言えた、切ないまでの羨望の言なのである。もしくは、獄中で「惟此褊心、顯明臧告」<sup>法</sup>と告白するよう

一箇の風景として曝されている。風景として沈黙を強いられ、しかも表面は神色自若と装わねばならない悲しいまでの内面を想い見なければ、何も見ないに等しい。

阮籍嫂嘗還家、籍見與別。或譏之。籍曰、禮豈爲我輩設也。(世說新語任誕篇)

に、阮籍の如くには生きられない、自身は自身の生きよう以外に生きるすべがなく、ひたすら權力争いの渦中に傾斜してゆくことを強いられた者の、深い絶望の言である。阮籍や嵇康たちの生きた時代は、各自に各自なりの生きざまと諦観を死を賭けて強いた時代であつたのである。

人はこういう挿話に阮籍の反俗の激しさと潔よさをのみ評價するが、しかし、自身の家の内部に於いてすら反俗の姿勢を見せつけねばならない悲しみは、従来ともすれば見落されがちなのではなかつたか。ここでの「或」とはそもそも何者なのか。家の奥までスパイがいたとでも言うのだろうか。「詠懷詩」でも「親昵懷反側、骨肉還相讎」(其七十二)という。兄喜との政治的立場の離反を痛歎する嵇康や、嵇康の連座事件の發端となつた呂安と兄巽との確執<sup>註</sup>などから類推すれば、阮籍に關するこの挿話も、私生活にまで視られる存在でしかなく、悲しい風景たる存在の内面を、上邊は反俗のことばとして垣間見せているのではないか。また、

阮公鄰家婦有美色、當壚酤酒。阮與王安豐常從婦飲酒。

阮醉、便眠其婦側。夫始殊疑之、伺察終無他意。(同右)

も、兩者のやりとり自體の對比の面白さ以上に、それにかかわらず飲酒食肉をやめることなく、平然たる態度に終始する阮籍の内面が問題である。たとえ「神色自若」たる涼しい顔であつたとしても、司馬昭や何曾らの視線の前では

これなども阮籍その人の廉潔ぶりを傳える話には違いないのだが、その實は酒屋の主人が如き者にまで「伺察」さ

れ、低次元での評價を強いられる存在でしかないのである。「險路多疑惑」(其六十九)とか「怨毒常苦多」(其十三)とか擧げればきりが無いほど、陰謀に渦巻く苛酷な時代を生きねばならない苦惱を吐露する。しかもその胸のもだもだをどうすることもできず、「綸深魚淵潛、矧設鳥高翔」(其七十六)「胸中懷湯火、……終身履薄冰」(其三十三)などと告白するように、ひたすら慎重に一風景として耐え續けてゆかねばならない。

このように沈黙を強いられる現實から詩へに向けての激しい逸脱を、視られる存在から視る存在への激しい轉位と言ひ換へることも可能かと思われる。

### 三 二重の敗北性(一)・強いられた感受性

しからば逸脱のはてに視られる存在から視る存在への轉位がなし得たかと言うと、答は否である。其一でも「徘徊將何見」とあつたように、對象そのものへの同化の意志を持續しながらもそこに於いて見てしまうのは、またしても呪わしき現實のかげでしかない。五・六句にそれが著しい。今それを假りに、逸脱空間に於いてもどこまでも現實に強いられた感受性と名付けておこう。

逸脱空間としての隱遁志向と神仙世界への憧憬という思

想の問題は別の機會の考察として、取りあえずは逸脱の意欲だけが突出しているという觀點からのみ論述を進めようと思う。先ず逸脱空間自體をイメージにおかぬ詩から考える。前に見た其十四には、「微風吹羅袂、明月耀清暉」とあつた。それは其一の「薄帷鑒明月、清風吹我襟」と同じく、對象(逸脱空間)への同化の意志と解すべきである。月を浴び風に身を委せ、孤立と辛苦とに耐えている時間が確かに内在している。しかしそれすら「晨鷄鳴高樹」時刻になつて現實に引き戻されるまでの、限りある時間でしかなかった。慰めの時間ではあり得ても、頑として存在する現實の物理的時間を前に、詩人は再び視られる存在へとかえされてゆく。

同じく前に見た其十七では、逸脱の激しさはより切迫し、従つて幻滅はより大きい。登高して全體性を一舉に獲得せんとする、つまり視られる存在から視る存在への激しい轉位を企てる。「悠悠分曠野」と萬感の思いを託し、ひたすら自己は視線と化して逸脱空間と同化せんとするも、そこに於いて見てしまうのは、「孤鳥西北飛、離獸東南下」姿でしかない。また蓬池に遊び古の魏都大梁を見たとき、「綠水揚洪波、曠野莽茫茫。走獸交橫馳、飛鳥相隨翔」(其十六)とも詠じている。激しく視ることを欲したのは、ど



こまでもついてまわる現實の先きにある世界であつたはずなのに、眼にするのは、そういう現實に強いられる孤絶者の後姿以上のものではないのである。

従つて、視られる存在から視る存在への轉位はどこまでも不可能でしかない。別様に言えば、現實から逸脱した世界へ自己同化を願ひながら、その熱く激しい意志だけが宙吊りのまま、逸脱空間にまで現實のかげは詩人の感受性に對して孤絶者の後姿を凝視するべく強いてくるのだ、と言えるであらう。

このことを側面から證し立てるのは、「詠懷詩」に頻出する「見」の一字の使用例である。一例を除いて、すべてが否定形として、もしくは反語形や疑問形として使用されている。「不見」（七例）、「不可見」（二例）、「焉見」（四例）、その他「何見」「豈見」「何時見」「不相見」が各一例である。また例外の一例も、「思見客與賓、……何時見斯人」（其六十二）と意味の上では否定的である。

次に古の隠士や賢者をイメージにおいた逸脱の詩を見るが、ことは全く同じである。

### 其九

歩出上東門 歩んで上東の門より出でよ  
北望首陽岑 北のかた首陽の岑を望め

下有采薇士 下に采薇の士ぞ有りける

上有嘉樹林 上に嘉樹の林ぞ有りける

良辰在何許 良辰は（今や）何許にか在る

凝霜霑衣襟 凝霜 衣襟を霑す

寒風振山岡 寒風 山岡に振ひ

玄雲起重陰 玄雲 重陰を起す

鳴鴈飛南征 鳴鴈 飛びて南に征き

鶗鴂發哀音 鶗鴂 哀音を發す

素質游商聲 素質は商聲に游り

悽愴傷我心 悽愴として我が心を傷ましむ

伯夷・叔齊が存在し得たよき日々はもはやどこにもない。首陽山の麓で詩人は深まる秋を感受しつつ佇むばかり。「凝霜霑衣襟」の一句が詩の展開に變調をもたらし、

歴史的共感からの思いもかけぬ拒絶の前での、詩人の幻滅のありようを的確に表現している。<sup>注⑥</sup>

強いられた感受性が秋という季節により敏感に反應してしまう詩は、右の詩以外にも多い。が、秋に敏感というだけならば何も阮籍に限つたことではない。次の詩句、

### 其七

炎暑惟茲夏 炎暑 惟れ茲の夏  
三旬將欲移 三旬 將に移らんと欲るか

芳樹垂綠葉 芳樹は綠葉を垂るるも

清雲自透迤 清雲そ自ら透迤たる

……(略)……

時の推移にこの他敏感な詩人は、地上の緑の樹々を我  
がものとしながらも、空をたなびく雲に秋の氣配を感受し  
てしまうのである。

こういう繊細さは、情況を先取りしてしまふ感受性に繫  
がつてゆく。それは、「但恐須臾間、魂氣隨風飄。終身履  
薄冰、誰知我心焦」(其三十三)というが如き、苛酷な時  
代を生きる難しさ、しかもそういう困難を抱えこんだ自  
己の緊張感の喪失を何よりも畏怖する獨特の自意識の、別  
様の表われとみなすことができるだろう。この其三十三の  
結びの詩句は、現實を生きる難しさということばに概括さ  
れ得ない屈折を持つ。すなわち、現實の前で視る人間の視  
線に射竦められているがために敗北的だというだけでな  
く、自覺として敗北性を生の根底に持つている、という意  
味での二重の敗北を抱えこんでしまつていると言える。ま  
た其十五の詩句、

開軒臨四野 軒を開きて四野を臨め

登高望所思 高きに登りて所思を望め

丘墓蔽山岡 (なれど) 丘墓の山岡を蔽ふのみ

萬代同一時 萬代も同じく一時なるか

顔淵や閔子騫の姿を追いつながら、そこでは死だけが共有  
できるとは、何たる皮肉だらうか。<sup>法⑩</sup>

ところで強いられた感受性に關し、阮籍の資質の上で見  
逃してはならないのは、「詠懷詩」や挿話の中に道(路)の  
イメージが切離せない點である。とりわけ「失路將如何」  
(其五)とか「楊朱泣岐路」(其二十)とか、道の中に於  
いて進路を思いあぐねている姿である。それは畏怖に近い  
かも知れない。しかもその畏怖は、現實に再び歸つてくる  
道がないのではないかというほどまでに、現實の世界に足  
を引き摺られてしまつていたのである。例えば、「寧與燕  
雀翔、不隨黃鶴飛。黃鶴遊四海、中路將安歸」(其八)を  
見るがよい。

#### 四 二重の敗北性(II)・現實への苦い回歸

其一の結びは、徘徊の後にかえつていやまず憂思を抱い  
て現實に歸つてゆく。其十四では、晨鷄の夜明けを告げる  
聲にはつと現實に引き戻される。其十七では、氣がつけば  
いつしか日暮れどきであつた。このように逸脫(徘徊や登  
高)によつて相乘される憂思を抱いて、詩人は必らず現實  
へとかえされてゆく。

この「詠懷詩」に基本的な表現構造は、壓倒的優位の現實を前に表現が宿命として持つ構造的な敗北性を示すものに他ならない。しかしこのことが直ちに、現實に對する「詠懷詩」の位相の敗北性を示すということには繋がらない。要は、「詠懷詩」に内在した敗北の二重性が、何も視ることができなかつた虚しいだけの時間という事實をどれだけ内實として超え得たか、にかかつていると考えられる。例えば空白でしかなく敗北でしかなくとも、對象への同化と違和の時間、もしくは物理的時間とのねじれに驚く姿が、そこには確かにあつた。つまり「詠懷詩」の特徴を、その熱つばさと激しさ、さらに逸脱の運動域として把握するならば、そこには二重の敗北でしかないが負の持續とも言うべき時間が内在しているのではないか。それこそが、思想概念とか精神世界とかからの接近とは別箇に、表現が獲得した運動域として、言つてみれば詩人の實存としての持續的慰め（注）に結果としてなり得たのではないか、と思われる。

何故に今性急に推論するかと言うと、どうして阮籍は詩に於いても現實に歸つてゆくことが可能なのか、歸つてゆくとうとする姿勢を守り續けられるのか、という「詠懷詩」についてまわる根底的疑問故である。なるほど苛酷な時代

が強いたと言えばそれまでである。少し觸れた道（路）の詩人としての資質にもある程度は關係があるかも知れない。しかし阮籍を語ることは、表現者としての存在の深さと痛みを語る以外にないのだとするなら、先ず何よりもそれへの見通しが性急に要請される、と筆者は考へる。二重の敗北性を背負つて再び現實へ歸りゆき、しかも去勢された一官僚でもなく、かといつて單純な反抗者でもなく、終始一貫視られる風景たる存在であり續けられるのは、一體何故か。そのエネルギーとなつたのは何か。そこでの「詠懷詩」の存在は何であり得たのか。表現に於ける思想という観点から、つまり「詠懷詩」の抱える∧詩∨と現實の表現構造の側から、そのエネルギー源を探らうとするならば、「至慎」というが如き處世の次元の問題ではなく、詩自體が抱えこむ敗北の構造に行きつくのではないか。すなわち運動域として慰めの持續を内實として持ち得たことに由來する、と推論するわけである。

二重の敗北性を背負い現實に振り戻されたとき、それは即自的に敗北であつたのでなく、其三十三の結びで見たように、直面した現實の諸關係に於いて自覺として敗北であり得たのであつた。但し、もう一度反轉させて言えば、それはあくまで壓倒的な現實の前では敗北でしかないという

先驗性を有する以上、敗北の自覺によつても決して勝利し得るといふものでも勿論ない。弾きかえされた現實は呪わしく頑として在る。この崩れない關係の前では、思想的な諦觀からも敗北的でしかなく、詩人として再び逸脱へと敗北へと驅り立てられるのである。

さらにいささか大仰な見通しを恐れずに言えば、五言八十二首という連作の存在こそ、右の△詩▽と現實の關係を暗示しているのではないか。絶えず原點に振り戻され、突如噴出する。△詩▽は一貫してはじまりの構造を有する。「懐ひを詠ず」の一點にのみかかわつて、八十二首を引括めて△詩▽が在るのである。

最後に、二重の敗北性を背負つてふと氣付けば△詩▽から現實の方へ弾きかえされ、壓倒的敗北の場へと歸つてゆく、しかし事實として敗北であるのと、敗北の構造を表現が獲得し得たこととは雲泥の差がある。その強韌さこそ、阮籍の表現に於ける倫理性を象徴している、と言つても過言ではないと思われ。

(東京工業高等専門學校助教)

△注▽

① 「阮籍在晉文代、常慮禍患、故發此詠耳。」(文選李善注引)

と同時に顔延之は、「詠懷詩」の主張の一端に個々の事實を重ね合わせる讀み方にも慎重であつたようである。例えば鍾嶸も

「(詠懷之作)頗多感慨之詞、厥旨淵放、歸趣難求。顔延年注、怯言其志」(詩品上品阮籍詩評)と顔延之の微妙な態度を補足している。

② 以下本稿引用の「詠懷詩」の通し番號と字句は、すべて黃節「阮步兵詠懷詩註」による。

③ 李康「家誠」(世說新語德行篇劉孝標注引)

④ 「與山巨源絕交書」(文選卷四十三)

⑤ 「世說新語」德行篇。

⑥ 「幽憤詩」(文選卷二十三)

⑦ 「阮籍遭母喪、在晉文王坐、近酒肉。司隸何曾亦在坐、曰、明公方以孝治天下、而阮籍以重喪顯於公坐、飲酒食肉、宜流之海外、以正風教。文王曰、嗣宗毀頓如此、君不能共愛之、何謂、且有疾而飲酒食肉、固喪禮也。籍飲噉不輟、神色自若。」(世說新語任誕篇)

⑧ 稽康には「贈秀才入軍」十九首(文選卷二十四)には五首を採る)があり、推測できる。

⑨ 三國志王粲附傳裴注引「魏氏春秋」、世說新語雅量篇劉注引「晉陽秋」に載す。

⑩ 「凝霜」の語は他にも、「凝霜被野草」(其三)、「凝霜霑野草」(其四)、「清露爲凝霜」(其五十)と使用例がある。

⑪ 其十五の「丘墓蔽山岡」と見える「山岡」の語は、他にも「高鳥翔山岡」(其四十七)、「(鳳凰)日夕栖山岡」(其七十九)と理想の姿を追いながら、現實は「松柏鬢岡岑」(其十三)とか「寒風振山岡」(其九)とかでしかない、というふうに詠ぜられる。

⑫ ここで「實存としての持續的想め」と言つたのは、福永光司

〔氏の論文「阮籍における懼れと慰め」東方學報京都第二十八册〕の中で、神仙思想に於ける高次の慰めを隣間的エクスタシーの世界として把握されていた、その言い方に對置させてである。